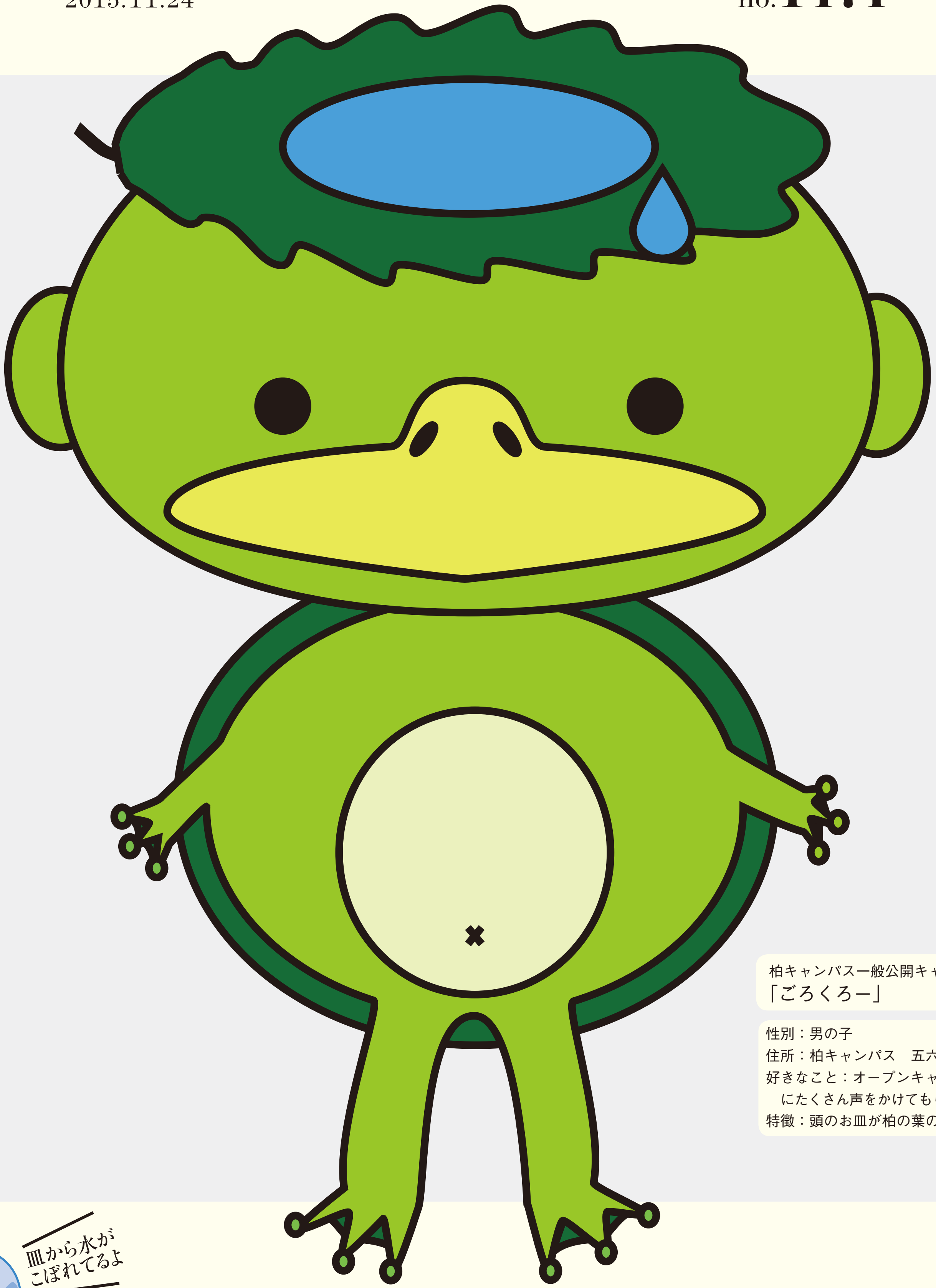
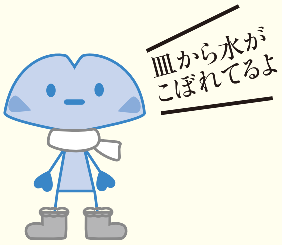
# 学内広報

2015.11.24
no.1474



柏キャンパス一般公開キャラクター
「ごろくろー」

性別：男の子
住所：柏キャンパス　五六郎池
好きなこと：オープンキャンパス（人にたくさん声をかけてもらえるから）
特徴：頭のお皿が柏の葉のかたち




東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

この6年間の本学を導く五神総長の指針

# 「東京大学ビジョン2020」公表

この6年間の本学を導く五神総長の指針

# 「東京大学ビジョン2020」

The University of Tokyo: Vision 2020 - President Gonokami's Action Plan

## 「東京大学ビジョン 2020」の公表にあたって

東京大学総長
**五神 真**

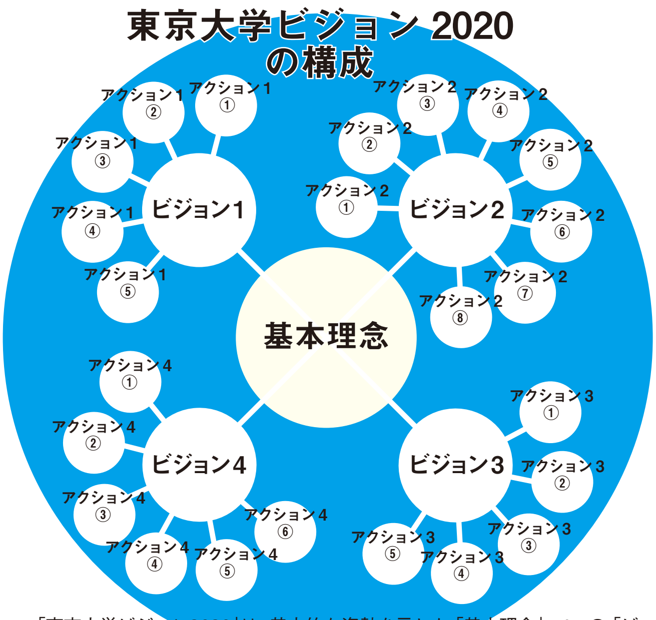
東京大学は、本年が創立138年目となります。終戦をほぼ中間点として約140年が経過しました。この間、科学技術の進歩を背景として、人類はその力を飛躍的に拡大し、活動は国境を越え、社会の様相は大きく変わりました。その中で日本は、高度な科学技術や学術を牽引力として、アジアにあって世界をリードする地位を築きました。

しかし、一方で、資本主義や民主主義といった現代社会を支える基本的な仕組みの限界も露わになってきています。地球環境の劣化、資源枯渇、地域間格差といった地球規模の課題が顕在化し、世界情勢はますます不安定になっているように感じます。より大きな力を得た人類がどのようにして、安定的で平穏な社会を構築するのか、その道筋は明らかにはなっていません。私は、多様な人々が尊重しあいながら協力して経済を大きく駆動する新たな仕組みを生みだすことが必要だと考えています。この新しい仕組みを駆動するものは人々の知恵に他なりません。すなわち、知恵が経済を動かす社会です。そうした社会に移行できるのかどうか、人類は今、分岐点に立たされていると捉えています。日本には、アジアの先進国として、それを先導する歴史的責務があり、大学はその中心的役割を担うべきと考えます。

東京大学には、140年にわたる継続的な国民からの支援の蓄積があります。これを最大限に活用し、次の70年間の人類社会をどう導き、その中で日本をどう輝かせるのか、そのシナリオを描き行動することが、今求められています。

そのために、大学の経営や運営について、従来の発想から脱し、そのあり方を転換することが不可欠と考えます。基盤的な活動を支える、国立大学法人運営費交付金の重要性は論をまちませんが、財政赤字を抱え少子化高齢化が進む我が国の状況において、支援を求めるだけでは責任を果たすことはできません。私達の本分である、教育・研究活動の質をいっそう高めるとともに、その価値を掘り起こし可視化していく必要があります。そして、それを駆動力として能動的に活動する組織体へと変化し、自立歩行する仕組みを備えていかねばなりません。

東京大学の歴史を70年単位で捉えると、私の任期中に新たな70年の時代に入り、任期中に東京大学に入学した学生は、まさにこの新たな時代を形作る世代となります。未来の社会を形作るこの若者達への責任を果たすため、今こそ東京大学は自らの機能を思い切って転換していかなければなりません。この東京大学の機能転換の理念と具体的方針を、このたび「東京大学ビジョン2020」としてお示しすることとしました。私が目指す東京大学の新たな姿を全学で共有し、全学の総力を結集して改革を力強く進めていく所存です。また、アクションについては、状況変化や各界からのご意見を踏まえ、適宜更新していく予定です。本ビジョンに基づく東京大学の取組に、各界の皆様のご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。




「東京大学ビジョン2020」は、基本的な姿勢を示した「基本理念」、4つの「ビジョン」、及びそれを実現するための「アクション」で構成されています。

# 公表

10月22日、東京大学は、五神真総長の任期期間中における具体的方針として、「東京大学ビジョン 2020」を公表しました。東京大学が「知の協創の世界拠点」となるためにこの６年間で実行すべきことを、大学にとって欠かせない［研究］［教育］［社会連携］［運営］の４分野ごとに明らかにしたものです。「卓越性」と「多様性」を基本理念に、大学が機能を転換すべき時期にあるという認識から導かれた指針。淡青色の教職員としてしっかり咀嚼しておきましょう。

## 「東京大学ビジョン 2020」

### 基本理念：卓越性と多様性の相互連環 ―「知の協創の世界拠点」として

Basic Principles: Synergy between Excellence and Diversity

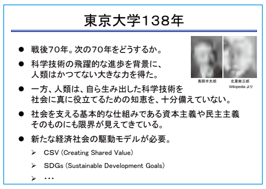
科学の進歩と新たなテクノロジーの開発は、人類を繁栄に導くための推進力であるはずです。しかし一方で、それは暴走するリスクを常にはらんでおり、人類はそれを制御するための知を同時に鍛えておかなければなりません。現在進行しつつあるさまざまな領域でのグローバル化は「地球社会」とも呼ぶべき新たな世界状況を生み出していますが、国立大学が法人化された2004年当時と比較しても、環境問題の深刻化、国際紛争の複雑化、格差や不平等の拡大など、容易に解を見出せない問題が次々に出現しています。だからこそ、東京大学が人類の安定的な発展に貢献する責任はいっそう重くなっていると言えるでしょう。

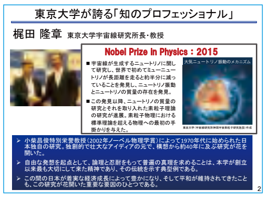
「東京大学ビジョン2020」は、こうした世界の危機的な状況を踏まえて、東京大学が今まさに果たさなければならない使命を力強く担っていくために、「卓越性」と「多様性」を2つの基本理念として掲げます。

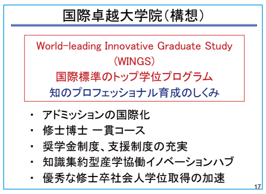
文系・理系のあらゆる分野で世界最高水準の教育研究を目指す東京大学が「卓越性」を基本理念として掲げるのは、当然のこととみなされるでしょう。しかし個々の分野がばらばらに併存しているだけでは、ただの「複数性」にすぎません。他者に向けて開かれた異分野間の対話と連携、そして時には摩擦や衝突があってこそ、卓越性はさらに高度な段階へと上昇していきます。価値や意味を単一の尺度で測ることができない異なるもの同士が、互いの差異と固有性を尊重しながらぶつかりあい、刺激を与えあうことが不可欠であり、そうした「多様性」を活力として、はじめて、総合大学としての卓越性が実現されていくのです。

一方、このようにして達成される卓越性は、異分野の成果を吸収することで新たな学知を生み出し、東京大学の知の多様性をさらに豊かなものにしていくことでしょう。文理を越えた複数分野の協働によって、これまで存在しなかった独創的な融合分野が生まれることもめずらしくありません。こうして絶えず連動しながら学術を進化させていくダイナミックな「卓越性と多様性の相互連環」こそが、東京大学の教育研究の基本的な駆動力です。

東京大学は以上の理念に基づき、アジアの中心的な学術拠点として、また世界最先端の知的活動を担う場として、これまで果たしてきた役割を着実に受け継ぎ、21世紀の地球社会に貢献する「知の協創の世界拠点」としての使命を担うべく、今後もいっそうの努力を重ねていきます。



←マスコミとの交流会（10月22日）で総長が提示した資料より（抜粋）。次の70年に向けての決意や、梶田隆章先生に代表される「知のプロフェッショナル」の価値、その育成の仕組みとしての国際卓越大学院構想、様々な壁を越えた協働関係による社会連携のイメージなどが語られました。

## アクション1:〔研究〕

**① 国際的に卓越した研究拠点の拡充・創設**

東京大学が強みを持ち世界をリードしている分野や、着実に継承すべき独自の分野をさらに伸ばすとともに、東京大学の枠を超えた共同研究や国際的な連携を推進し、分野融合型の新たな学知を世界に先駆けて創出するなど、国際的に卓越した研究拠点を拡充・創設する。

**② 人文社会科学分野のさらなる活性化**

人文社会科学分野のすぐれた研究を積極的に支援することでさらに活性化し、当該分野における東京大学の国際的な存在感を向上させる。

**③ 学術の多様性を支える基盤の強化**

東京大学が保持する学術資産のアーカイブを構築し、その公開と活用を促進することで、学術の多様性を支える基盤を強化する。

**④ 研究時間の確保と教育研究活動の質向上**

研究支援制度の充実や業務の効率化などを通じて、教員が研究に専念できる時間を確保するとともに、適切な教員評価を行い、教育研究活動の質をさらに向上させる。

**⑤ 研究者雇用制度の改革**

研究者雇用制度改革を進めて「研究する人生」の魅力を高め、国内外から多様ですぐれた人材を獲得する。

## ビジョン1：〔研究〕
## 新たな価値創造に挑む学術の戦略的展開

Vision 1: Research

東京大学は、これまでも一貫して教育研究の卓越性と多様性を重視してきました。「東京大学ビジョン2020」ではこの精神を受け継ぎながら、研究においては両者の相互連環をいっそう強く意識し、人間と世界のより透徹した理解を目指すとともに、それを通じて新たな価値創造に挑む学術を戦略的に展開します。

具体的には、文系・理系ともにすぐれた学術成果をこれまで以上に国内外に発信すると同時に、誰もが安心して研究に専念できる環境を整備していくことで、国籍・性別・年齢を問わず、いっそう多くのすぐれた人材を東京大学に引きつけます。そして集まった人々が分野や組織の枠を越えて切磋琢磨する機会を提供することで、さらに学術を高度化するとともに、学際的な研究を推進し、新たな価値創造を実現していきます。こうした「卓越性と多様性の相互連環」は、両者が緊密に連動しながらダイナミックに上昇していくという意味で、いわば「らせん運動」にもたとえられるものでしょう。

## アクション2:〔教育〕

**① 学部教育改革の推進**

初年次教育、習熟度別授業、新たな進学選択方式、体験活動プログラム等の学部教育改革を着実に推進する。

**② 国際感覚を鍛える教育の充実**

学生の眼を世界に開かせるカリキュラム構築を支援し、海外での修学を促進するとともに、教養学部英語コース(PEAK)、トライリンガル・プログラム(TLP)、グローバルリーダー育成プログラム(GLP)等のプログラムをさらに充実させる。

**③ 国際卓越大学院の創設**

「国際卓越大学院(WINGS,World-leading Innovative Graduate Study)」の創設等によって大学院教育を強化し、高度な「知のプロフェッショナル」たる博士人材を育成する。

**④ 附置研究所等の教育機能の活用**

多様な分野で展開される附置研究所・センター等の研究活動を通じた教育機能を活用し、高度な専門性を持つ研究者を育成する。

**⑤ 学生の多様性拡大**

高大連携を強化し、推薦入試等による入試改革を着実に進めるとともに、海外からの留学生等を積極的に受け入れ、学生の多様性を拡大する。

**⑥ 教養教育のさらなる充実**

学部前期課程の教養教育に加え、学部後期課程・大学院における後期教養教育を充実させ、専門的知見と幅広い視野を兼ねそなえた人材を育成する。

**⑦ 東京大学独自の教育システムの世界発信**

東京大学ならではのすぐれた教育システムを標準モデルとして体系化し、世界へ発信する。

**⑧ 学生の主体的活動の支援**

スポーツ・文化活動・国際交流等、学生の様々な主体的取組が、学業とあいまって人間的成長に資するよう、支援を進める。

## ビジョン2：〔教育〕
## 基礎力の涵養と「知のプロフェッショナル」の育成

Vision 2: Education

学部・大学院を通じて、東京大学の教育理念である「世界的視野をもった市民的エリート」(東京大学憲章)の養成を基本としつつ、公共的な視点から主体的に行動し新たな価値創造に挑む「知のプロフェッショナル」の育成をはかります。

特に学部教育では、自ら原理に立ち戻って考える力、粘り強く考え続ける力、そして自ら新しい発想を生み出す力という3つの基礎力を涵養します。また、学生の国際感覚を鍛えることによって、世界の多様な人々と共に生き、共に働く力を持った人材の育成にもいっそう力を入れていきます。

高度な専門性を養う大学院教育では、新しい価値創造の試みに果敢に挑戦するとともに、他分野や異文化との積極的な対話と協働を進め、その知見を主体的な行動によって社会にフィードバックできる人材を育成します。

また学部・大学院ともに教養教育をさらに重視し、卓越した専門性をそなえると同時に、多様な視点から自らの位置づけや役割を相対化することができ、謙虚でありながらも毅然として誇りに満ちた人間を育成します。

## ビジョン3：〔社会連携〕
## 21世紀の地球社会における公共性の構築

Vision 3: Cooperation with Society

21世紀の地球社会においては、大学の果たすべき社会的な役割がこれまでになく大きくなっています。それゆえ、東京大学も、「学問の自由」を堅持しながら社会における多様な利益の増進に貢献する責務を負っています。そしてそれは、何よりも日本と世界における真の「公共性」の構築と強化への貢献を通じて行われるべきものです。

「公共性」というとき、社会的・空間的な広がりにおけるそれだけでなく、歴史的・時間的な流れの中でのそれも視野に含めなければなりません。いまは善とされる行為であっても、未来の世代の幸福を阻害する可能性があるならば、慎重に検討される必要があるでしょう。

一方、すぐには実現困難であったり、いまは評価されにくいようなことがらであっても、人類の未来に資することであれば、勇気をもって推し進めることが求められるでしょう。そのためには、東京大学の140年におよぶ卓越した多様な学知の蓄積を十分に活用し、国境・文化・世代の壁を越えた協働関係を拡大していくことが必要です。東京大学は産学官民の緊密な連携をはかりつつ、その学術的成果を広く人類社会に還元していくことを目指します。

### アクション3:〔社会連携〕

**① 学術成果の社会への還元**

人類の幸福と安定的発展に資するため、防災や医療等、諸分野における研究を幅広く推進し、その学術成果を積極的に社会に還元する。

**② 産学官民協働拠点の形成**

学術成果を踏まえた新たな価値創造を推進し、これを広く社会に展開するため、産学官民の連携による協働拠点を形成するとともに、これを担うすぐれた人材を育成する。

**③ 学術成果を活用した起業の促進**

関連する研究機関や民間企業、政府等と有機的に連携してイノベーション・エコシステムを充実させ、東京大学の学術成果を活用した起業を促進する。

**④ 国際広報の改善と強化**

国際広報の仕組みを抜本的に改善・強化し、東京大学の多様な学術資源や教育成果の価値を可視化して世界に発信する。

**⑤ 教育機能の社会への展開**

東京大学公開講座や東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム（EMP）等、教育機能の社会的展開をさらに推進する。

## ビジョン4：〔運営〕
## 複合的な「場」の充実と活性化

Vision 4: Operations

東京大学は、本郷・駒場・柏の3極及び白金台キャンパスや各地の施設・演習林など、具体的な現実の空間から構成されていると同時に、ICTの急速な発達によって、サイバー空間上にも活動の場を広げています。たとえば大学の象徴ともいえる図書館についても、現在、本郷キャンパスでは新図書館計画が進み、現実空間と仮想空間を有効に連動させた知のアーカイブが構築されつつあります。

一方、東京大学という「場」は、言うまでもなく、そこで活動する人々によって命を吹き込まれ、実体化されています。それは自立した個人の集合であると同時に、さまざまな集団や人的ネットワークの重層体であり、外部に開かれた流動性も有しています。

東京大学はこうした複合的な「場」を柔軟かつ機能的な管理運営によって活性化し、ハードとソフトの両面で充実させることによって、そこで展開される「卓越性と多様性の相互連環」をさらに加速するよう、不断の努力を重ねていきます。

### アクション4:〔運営〕

**① 機動的な運営体制の確立**

本部と部局の役割の明確化と意思疎通の緊密化を図り、「現場との対話」を基軸に据えて機動的な運営体制を確立する。

**② 基盤的な教育・研究経費の確保**

基盤的な教育・研究経費を確保するため、財源の多元化と経営資源の拡大を促進する。特に、限られた資源を有効活用するため、東京大学の活力を最大限発揮できる戦略的な資源再配分システムを構築する。併せて、光熱水料やスペース等については、競争的研究費の活用等、適切な経費を充てることを徹底する。

**③ 構成員の多様化による組織の活性化**

男女共同参画やバリアフリー等の推進を通じて構成員の多様性を拡大するとともに、専門職も含めた効果的な教職協働を促進し、東京大学の活力を最大限に発揮できるよう組織の活性化を図る。

**④ 卒業生・支援者ネットワークの充実**

卒業生や支援者のネットワークを充実させ、大学との連携・協力を強化する。

**⑤ 世界最高の教育研究を支える環境の整備**

「世界最高の学びの舞台」にふさわしい場を実現するため、持続可能性を有し、価値創造と教育研究の社会展開を可能とするような環境の整備・施設の運営を行う。

**⑥ ３極構造を基盤とした連携の強化**

駒場・本郷・柏の３極を中心としつつ、東京大学が所有するさまざまな組織や施設の連携を強化し、人的交流や協力関係を活性化する。

**問い合わせ：本部企画課（kikakukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp）**

教養教育の現場から

# リベラル・アーツの風

第12回

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

## 1年生が科学実験を能動的に経験する演習

／初年次ゼミナール理科「サイエンスの在り方　〜知の構成〜について」

お話／教養教育高度化機構初年次部門
総合文化研究科・特任講師　松本 悠

### 科学研究の技法に触れる必修授業

──初年次ゼミは1年生の必修ですね。

「はい。大学に入った初年次に、科学研究を行う上での技法に触れてもらおう、早い段階でアカデミック体験をしてもらおうという授業です。理科については今年度が最初で、100クラスほどあります。私のゼミでは、「科学甲子園」や「物理オリンピック」で取り組むような実験課題をやってもらいました。全13回のうち、1・2週目はテキストを使う講義、3週目は論文検索で、4週目以降が演習。学生21人が興味ごとに5組にわかれ、グループワークで実験課題に取り組みました」

──演習の中身を教えてください。

「4〜8週目は、準備段階として3つの課題を決めて与えました。光の干渉を調べて波と粒子という2つの特徴に触れてもらう実験、いくつかある材料のうちどれをどう使ってもいいからたまごを割れないよう工夫して2階から落とす実験、位置エネルギーを電気エネルギーに変換してコンデンサに蓄えどれだけプロペラを長く回せるかという実験の3つです」

「9週目以降は自分らで実験計画をたてて実行してもらいました。条件はお金をかけないこと。様々な色のLEDが発光する電圧を測定してプランク定数を求める、回生エネルギーでプロペラを回し模型飛行機を飛ばす、サボニウス型風車で発電する、といった各グループが選んだ題材の実験を3コマ使って行い、13週目にプレゼンを行いました。自分で1から実験計画をたてて実行し発表まで行う経験をしてもらいたかったんです」

### 実験では頭より手が重要なことも

──やってみて予想外だったのは？

「限られた材料で実験するのが意外と難しかったようです。たとえば、光の実験で、CDにレーザーを当てると干渉が見える現象は学生もみな頭では知っていますが、測定するために実験装置を自作するとなると途端に困ってしまう。うまい実験の組み立て方がわからないんです。頭より手をどう使うか、ということですね」

──材料がうまく切れないとかですか？

「たとえば、CDを発泡スチロールに垂直に固定するやり方ですね。これがわからず、テープで貼ったり手で押さえたままにしてぐらついたり、溝を切って立てる際に垂直に切れずに傾いたり。直方体の発砲スチロールの側面に貼るのが一番簡単ですが、それに気づけなかったり。干渉の明点の距離を測るための定規を上手く設置できず、正確な測定ができなかったグループもありました」

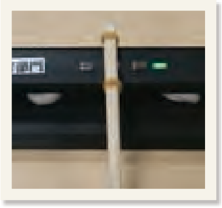
──工作の力が求められますね。

「サイエンスとは一見関係ないようですが、科学実験に携わるとこういう細かいことの可否が重要な分かれ目になるんです。STEM教育においてもエンジニアリング（E）が重要な要素として取り上げられていますし、素粒子の実験でもガムテープの使い方が重要だったりしますね」

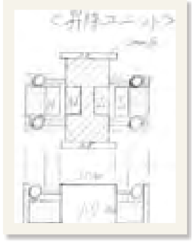
──学生の反応はいかがでしたか？

「当初、楽しくやることと失敗を経験してもらうことを意図しましたが、楽しかったとかためになったとか、計画性のなさを思い知った、目標に合った計画立案が重要だと痛感した、というコメントもありました。だいたい思惑通りかな（笑）。題材的にはもう少し大学レベルの内容に結びつけられたらなおよかったですが、サイエンスとして物事を能動的に追求し、どのように知識・知見を得ていくのかの一端は経験してもらえたかなと思います」

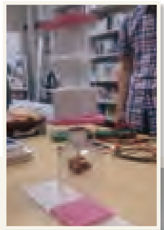
↑光の実験（4週目）では、発砲スチロール、レーザーポインター、CD、DVD、ブルーレイ、割り箸、輪ゴム、定規、テープ、ソフト粘着材などを使って実験装置を作成。この回は光を使った研究で知られる五神総長も視察に訪れました。



←レーザーポインターのボタンを押しっ放しにするには割り箸と輪ゴムを使えば楽。そこに気づかないと苦戦することに……。



←リニアモーターカーの原理を応用し、磁気力によってロケットに見立てたユニットを打ち上げる実験を企画したチームのイメージ図（部分）。



←弱い風でも発電がしやすい「サボニウス型風車」。

↓それを自作して行った風力発電実験の結果をプレゼンするチーム。

教養教育高度化機構（内線：44247）KOMEX

## あちこち そちこち 東京大学 第7回

本郷・駒場・柏以外の本学を現場の教職員が紹介

東京大学 北京代表所の巻

所長 宮内雄史

# 東大生に中国と触れる機会を

北京校友会新年会：毎月講演会・懇親会を開催しています。

北京代表所は2005年4月に開設されました。それは、中国の大学・学生の状況が飛躍的に変化しつつある時期でした。入学者が1999年から毎年50万人ペースで増加、今や入学者700万人、学生総数2700万人の規模です。海外に出る学生は2014年は46万人に達し、海外留学中の学生は110万人と日本人の20倍程になりました。中国へ来る外国人留学生も、2014年は40万人近くとなり、米・仏・独からの学生は日本への11倍程、インド人は19倍、ロシア45倍、アフリカは32倍と、中国の主要大学のキャンパスを歩けば、大変国際色豊かな印象を受けます。大学ランキングでも、北京大・清華大が東大と肩を並べる位置へ上昇しました。

そうした中で北京代表所は、中国の主要大学との交流促進連絡窓口、優秀な中国人学生受け入れサポート、東大生の中国留学促進、現地校友会活動への協力等を主な業務としています。東大への中国人留学生は2005年が657人、全留学生の30%であったのが、2015年は1268人、41%となりました。代表所は北京の大学地区にあり、学生たちが突然訪ねて来たり、高校生を連れた親が来訪したりもします。代表所に学生を集めて説明会を行ったり、奨学金プログラムのTV会議システムを使ったインタビューに協力したりしています。

ただ残念な事に、中国へ留学する東大生は依然20名前後です。「体験活動」等で中国を訪問した学生達は既成の認識との差に驚愕します。少しでも多くの東大生に中国と触れる機会を提供したいと考えています。

**1.** 代表所会議室で学生達への説明会。**2.** 東大・北京大が幹事校の日中学長会議（2013年@厦門）。**3.** 日本語学習者の集まりで東大紹介。**4.** 「体験活動」で学生交流（@北京大東門）。

http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/amami/amami-top.html

## 第27回・特別版 留学生さんいらっしゃい！

海を越えて東大に来た学生に聞きました。

# 文京区多言語化プロジェクトに協力

通常は留学生を紹介する本欄ですが、今回は留学生の注目の活動について、国際センターから紹介します。

本学では、外国人留学生や研究者の増加、英語プログラムによる交換留学生の増加等により、在住自治体での行政諸手続き（住民登録・国民年金保険等の加入等）や行政情報の多原語化充実を求める声が強くなっています。一方、本郷キャンパスのある文京区では、在住外国人へのサービスの多言語化が喫緊の課題です。双方のニーズに対応すべく、本年度より行政と大学が連携し「多言語化サポートプロジェクト会議」が発足しました。

本プロジェクトは、留学生が多く在留する文京地域ならではの特性を生かし、東京大学在学の留学生および日本人学生の地域貢献活動と位置づけられています。単なる文書翻訳にとどまらず、自治体担当者と学生による合同会議や区役所内視察を通じ、外国人当事者としての課題を行政に伝え、更に行政手続きの際の困難さ、不便さの現状を知った上で多言語化していくという協働型による実施は、都内でも新しい形の官学連携と注目されています。学生の前向きな姿勢は行政担当者からの評価が高く、また学生からは本活動に大きな意義とやりがいを感じるという声が聞かれます。

「『介護』の意味にあたる単語が母国語にない場合の最良の翻訳は？」、「行政日本語の直訳より、外国人にとっての理解しやすさ、必要情報の限定を優先すべきでは？」、「ネイティブスピーカーのみならず、英語文書で理解する多くの外国人に最も理解しやすい翻訳は？」等、学部から博士課程、専攻を超えたメンバー8名の積極的な意見交換と翻訳作業が続いています。

文京区内には目白台国際宿舎（仮称）の整備計画が進んでいることからも、今後外国人居住者の増加は確実。本プロジェクトは、手続きの際や日常生活の場で、本人や担当チューター、部局担当者にとってのサービス向上・負担軽減に繋がるものと期待されています。

（国際センター講師・原田麻里子）

→区役所庁舎内を視察し行政事務を学ぶ一同。多言語表示の不足等について貴重な指摘も。

←中国・台湾・韓国留学生と語学力の高い日本人学生、計8名のチームワークで進行中！

国際センター本郷オフィス http://www.ic.u-tokyo.ac.jp/ic/

# ワタシのオシゴト 第117回

RELAY COLUMN

工学系・情報理工学系等情報図書課
情報総務チーム係長 鈴木 剛紀

## 図書系ですが、図書館っぽくない!?

おかげさまでいつも大繁盛！の工2図書室で。

私は、図書館のオシゴトをしております。

……ではあるのですが、皆さんが想像する図書館らしい仕事は少ないです。庶務、人事、会計、PCの管理など、様々な仕事をしています。でも、そういう仕事があって図書館も大学も日々回っているのだということを、今の部署にいるとよく感じます。目下最大の任務は、耐震改修を終えて再開を目前に控えた工4号館図書室の開室準備です。当たり前に図書室を使えるようにする、というのは実は簡単なことではないなあと、改めて感じています。

以上の工学・情報理工学図書館の仕事の他に、もう一つ大事な仕事に関わっています。皆さんは「新図書館計画」をご存じですか？　総合図書館で工事中のアレです。関連してたくさんのイベントを開催していて、その企画や運営を担当しています。今、図書館は大きく変わろうとしています。これからの図書館はどうあるべきか、そのビジョンをイベントを通じて模索し、皆さんと共有できるよう、日々努力しています。

休日は愛犬とお散歩。至福の時です。

得意ワザ：ヘンなことを思いつくこと
自分の性格：忘れっぽい分だけ前向き
次回執筆者のご指名：飯野洋一さん
次回執筆者との関係：敬愛する図書館の大先輩
次回執筆者の紹介：垣根のない親しみを感じる方です

# Crossroad

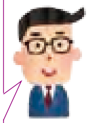
産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部　第120回

## 特許出願は論文・学会発表の前に！

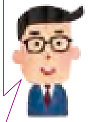
今回は、論文・学会発表を行う内容に発明が含まれている場合のお話です。発明について特許を取得するためには、特許出願された発明に新規性がないと特許が取得できません。つまり、特許出願より前に発明の内容を論文発表や学会発表等で公表してしまうと、自分の発明であっても新規性を失い、特許が取得できなくなってしまうので、注意が必要です。

えっ！
もう発表しちゃいました…。



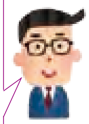
救済制度によって、新規性を失うことが救済される可能性があります。救済制度には時間的制限があり、日本では発表後6ヵ月（新規性喪失の例外規定）、米国では1年（グレースピリオド）の間に出願する必要があります。欧州、中国など救済されない国もある等の制限もありますので、最初からこの制度に頼るのは避けましょう。

発表前に出願するには、どのくらいのスケジュールを考えればよいですか？



発明を行った場合は速やかに発明届を提出していただきますが、学内手続（発明届の提出から承継判定）、その後出願準備を合わせると2ヵ月程度は必要です。発明の内容を公表する予定がある場合は、できるだけ早期に発明届の提出を行うようにしましょう。なお、どうしても発明届の提出が遅れそうな場合は、産学連携課知的財産マネジメントチームまたは(株)東京大学TLOに、前もってご相談下さい。

学内手続を待っていたら、発表前の出願が間に合いません！



特例として、学内規定（東京大学発明等取扱規則第22条）により対応できます。この規定は、公表等の理由により承継判定結果が通知される前に出願を行う必要がある場合、「迅速な処理を必要とする申立書」を提出して頂くことにより、発明者自らの責任において発明者の名義で出願の手続きを開始することができるというものです。

上記のように救済制度や特例規定はありますが、なるべく使わずに公表前に出願ができるように心がけましょう。特に、外国への出願を考えている場合は、救済されない国があるので注意が必要です。

http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/

# インタープリターズ・バイブル
第100回

総合文化研究科 准教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター部門
石原 孝二

## 「合理的」なものに限る?

来年4月に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が施行され、行政機関や事業者は「社会的障壁の除去」について「合理的な配慮」を行うことが義務付けられます。この「合理的な配慮」というのは一体何なのでしょうか？　なぜ「合理的」という限定がつくのでしょうか？　国連の障害者権利条約の定義などをみると、「合理的な配慮」とは、配慮において「均衡」を保ち、「過度の負担を課さない」ものということを意味するようです。しかし障害をもつ人の日常的・社会的生活を妨げる社会的障壁は無条件に除去されるべきなのではないでしょうか。

ちょっと唐突ですが、私にはこの問題は、リスクに関する予防原則の適用の問題を思い起こさせます。予防原則とは、科学的な証拠が十分得られていない段階で危害をもたらす可能性がある問題に対策をとるという原則です。予防原則が国際的なルールとして初めて明確に位置づけられた1992年の国連環境開発会議（地球サミット）・リオ宣言（大竹千代子・東賢一『予防原則』合同出版など参照）では、予防原則の適用において、「費用対効果」を考慮に入れることが盛り込まれました。この「費用対効果」という要素によって、リオ宣言の中に予防原則を盛り込むことが可能になり、またリオ宣言がその後の各国の環境政策に影響を与えることを可能にしたのではないかと推測します。

費用対効果などを踏まえた「合理的」なものに限るという条件は、理念を骨抜きにする可能性がある一方で、理念を推進する側と、受け入れたくない側の合意形成を可能にするという側面もあります。社会的障壁の除去や予防原則の理念そのものに反対することは難しいと思いますが、現実には適応不可能であるとして反対することは十分可能です。しかし、必要性やコスト等を踏まえて「合理的」である限りにおいて適用するという条件で提案されると、反対することは困難でしょう。

科学は一般に、客観的で普遍的な知識を得ようとするものですが、「合理的」であるか否かの判断は状況や文脈に依存したものとならざるを得ません。そう考えると、「科学的」と「合理的」という言葉は対立するものであるようにも思えます。もっとも、科学も様々な点で費用対効果の制約に従っていると考えるならば、実際には科学もまた「合理的」なものに限られていると言えるのかもしれません。

**科学技術インタープリター養成プログラム**
http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/

# 救援・復興支援室より
第54回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

## 救援・復興支援室の活動（10〜12月）

| | |
|---|---|
| 10~11月 | 福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア |
| 10~12月 | 岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア |
| 11月5日 | 第 25 回救援・復興支援室会議 |

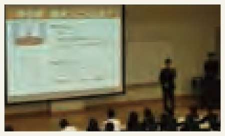
## ザシキワラシの日常㉘

本部企画課係長（遠野分室勤務）
文：佐藤 克憲

10月22日、釜石市にある岩手県立釜石高等学校にて開催された、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）「課題研究中間発表会」を初めて視察しました。SSHは未来を担う科学技術系人材を育てることをねらいとして、理数系教育に関する教育課程等の研究開発を行う高校を文部科学省が指定するもので、釜石高校は平成24年度から岩手県で3校目の指定校となっています（指定期間は5年間）。本学は「東京大学釜石カレッジ」において、以前本欄でも紹介したことのある釜石市民向けの連続公開講座等以外に、生産技術研究所次世代育成オフィスが中心となり同高校SSH事業への協力（中間発表会、最終発表会での助言等）を指定初年度から継続して行っており、今回も本学教員、大学院学生合せて7名が研究への助言のため同高校を訪れました（他大学・機関からも教職員が助言者として来訪）。

第1部は物理、数学、生物、化学各分野の班の生徒からのプレゼンテーションが行われ、第2部はプレゼンテーションを行った各班の研究内容をまとめたポスターを見ながら各大学・機関の教職員・学生が助言を行いました。スペースの都合で研究の詳細に触れられないのが残念ですが、高校の段階でかなり踏み込んだ研究を行うことに非常に驚かされました。本学教員・大学院学生を含む助言者からは、スライドの構成、写真の活用、フォント・ポイントの統一等のスライド作成の技術的な部分や、自分たちの研究についての知識がない人にも分かるよう作成するといった意識の問題について等のアドバイスがあり、高校生はメモをとりながら熱心に耳を傾けていました。最終発表会の視察が今から楽しみです！

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」。



（左）発表会の一コマ（地元特産の柿を使った研究）。（右）本学教員、大学院学生による助言の様子。

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp　内線：21750（本部企画課）

## トピックス

全学ホームページの「トピックス」(http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/) に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

| 掲載日 | 担当部署 | タイトル | 実施日 |
|---|---|---|---|
| 10月13日 | 空間情報科学研究センター | 柴崎亮介教授が 2015 年の Chinese Government Friendship Award を受賞しました | 9月30日 |
| 10月19日 | 人文社会系研究科・文学部 | 第 19 回東京大学文学部北見公開講座を開催しました | 10月9日 |
| 10月20日 | 農学生命科学研究科・農学部 | 抗加齢研究シンポジウム「抗加齢研究の最前線：ワシントン大学 今井眞一郎先生を囲んで」 | 10月5日 |
| 10月22日 | 政策ビジョン研究センター | 「グローバルなエネルギー需給の展望と日本及び ASEAN の課題」開催報告（基調講演：IEA 事務局長 Fatih Birol 博士） | 9月16日 |
| 10月23日 | 卒業生室 | 「第 14 回東京大学ホームカミングデイ」開催報告 | 10月17日 |
| 10月29日 | 教育学研究科・教育学部 | 大学院教育学研究科・教育学部留学生懇談会の開催 | 10月21日 |
| 11月2日 | 柏地区共通事務センター | 柏キャンパス一般公開 2015 を開催 | 10月23日 |
| 11月4日 | サステイナブルキャンパスプロジェクト室 | IARU サステイナブルキャンパス交換学生の帰朝報告会を開催 | 9月15日 |
| 11月6日 | 環境安全本部 | 平成 27 年度　総長安全衛生パトロール実施される | 10月9日 |

## お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

| 掲載日 | 担当部署 | タイトル | URL |
|---|---|---|---|
| 10月22日 | 本部企画課 | 「東京大学ビジョン 2020」の公表について | http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1302_00002.html |
| 11月1日 | 本部人事給与課 | 人事異動（教員） | http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/ 人事異動（教員） |
| 11月6日 | 本部研究推進企画課 | RU11 提言：自由な発想に基づく独創性豊かで多様な研究を継続的に支援することの重要性について | http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0701_00002.html |
| 11月9日 | 本部入試課 | 平成 28 年度推薦入試出願状況 | http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0605_00012.htmll |

## CLOSE UP 第19回文学部北見公開講座を開催 （人文社会系研究科・文学部）

常呂高校での講演風景（白波瀬教授）。

人文社会系研究科・文学部では、10月9日(金)、北海道北見市において第19回東京大学文学部北見公開講座を開催しました。本講座は、北海文化研究常呂実習施設がある北見市と平成12年から現地で共催しているものです。

北海道立常呂高校で行われた特別講座では、「若者にとっての高齢社会」と題して、本研究科副研究科長・社会文化研究専攻の白波瀬佐和子教授が、高校生に向け、いま直面する高齢社会が何を意味し、超高齢社会の未来に向けて何ができるのかを、質疑応答も交えながら講演を行いました。一般の方を対象とした一般講座は北見市民会館小ホールで開催しました。まず「私たちの漢字と秦の文字統一」と題して、本研究科アジア文化研究専攻の大西克也教授が、東京大学の赤門や銅像、日本と中国のお札など、身近にある様々な漢字の書体を紹介しながら、現代の漢字文化の源を、2000年以上前の中国に遡って考えるという講演を行いました。続いて、「『忠臣蔵』と切腹」と題して、本研究科次世代人文学開発センターの古井戸秀夫教授が、『忠臣蔵』の成り立ちや『忠臣蔵』にみられる「切腹」の意味について、歌舞伎の映像やレジュメ、文字資料等を交えながら講演しました。

普段は東京にいる本学教員が現地に赴き公開講座を定期的に開催することにより、長期にわたる北見市との関係を深める実績に繋がっており、次回以降への期待が多く寄せられました。

## 本年秋の紫綬褒章受章・文化勲章受章・文化功労者顕彰について （広報室）

山下友信 名誉教授（法学政治学研究科）、狩野方伸 教授（医学系研究科）、西村清彦 教授（経済学研究科）が、本年秋の紫綬褒章を受章されました。また、塩野宏 名誉教授（法学政治学研究科）、梶田隆章 教授（宇宙線研究所）が、文化勲章を受章されました。そして、佐々木毅 名誉教授（法学政治学研究科）、梶田隆章 教授（宇宙線研究所）が、文化功労者として顕彰されました。おめでとうございます。先生方の輝かしい功績を、ご本人のことをよく知る先生方が800字程度で紹介する記事については、全学ホームページの「お知らせ」欄からご覧ください（紹介記事は12月初旬に掲載の予定です）。

## CLOSE UP 抗加齢研究シンポジウムを開催 （農学生命科学研究科・農学部）

今井眞一郎教授による質疑応答の様子。

10月5日（月）に抗加齢研究シンポジウム「抗加齢研究の最前線：ワシントン大学 今井眞一郎先生を囲んで」を武田ホール（武田先端知ビル）で開催しました。当日は約200名の参加者が「Productive Aging」を考える機会となりました。松尾泰樹 文部科学省大臣官房参事官の挨拶に続き、慶應義塾大学 坪田一男教授（日本抗加齢医学会理事長）による「抗加齢研究新時代："食、運動、ごきげんでアンチエイジング！"」、ワシントン大学 今井眞一郎教授による「The NAD World 2.0: NAMPT/NAD+/SIRT1により制御される臓器間コミュニケーションの老化・寿命制御における重要性」の各講演が行われました。抗老化研究を専門とする学生や教職員だけでなく一般からも多くの参加があり、大変有意義だったとの意見が多数寄せられました。予定時間を大幅に過ぎた後も講演者との議論を望む研究者の列が続き、会は盛況のうちに終了しました。

## CLOSE UP PARI※・GSDM※主催の国際シンポジウムを開催 （政策ビジョン研究センター）

ファティ・ビロール博士（写真撮影：山下加代）。

※ Policy Alternatives Research Institute
※ Global Leader Program for Social Design and Management

9月16日（水）、国際シンポジウム「グローバルなエネルギー需給の展望と日本及びASEANの課題」を本郷の伊藤国際学術研究センターで開催しました。上田隆之 経済産業審議官と西村英俊 東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）事務総長の特別講演、ファティ・ビロール 国際エネルギー機関（IEA）事務局長の基調講演の後、ビロール事務局長、西村事務総長、田中伸男 笹川平和財団理事長のお三方をパネリストに迎え、芳川恒志 政策ビジョン研究センター特任教授がモデレーターとなって、パネルディスカッションを行いました。

本シンポジウムは、いくつかの意味で時宜を得たものでした。まず、ビロール博士は、IEA事務局長就任後初の訪日であり、その問題意識やIEAの活動方針について抱負を聞く貴重な機会となりました。第二にアジアを中心に国際的なエネルギー需給に構造的な変化がおきていること、第三には年末のCOP21を前に地球環境問題への関心が高まっている時期に開催されたことです。さらに、日本においては「エネルギー基本計画」や「長期エネルギー需給見通し」が策定され、将来のエネルギー政策の方向性が固まった時期でもありました。シンポジウムの詳細はhttp://pari.u-tokyo.ac.jp/event/smp150916_rep.htmlでご確認ください。

## CLOSE UP 「第14回東京大学ホームカミングデイ」を開催 （卒業生室）

銀杏並木フェスタの模様。

10月17日（土）、第14回東京大学ホームカミングデイが開催されました。

特別フォーラムは「安田講堂の90年〜生まれ変わったシンボル、時代の歩みとともに〜」と題し、モデレータの陣内秀信氏、パネリストの藤井恵介氏、吉見俊哉氏、千葉学氏が熱く語りました。冒頭には梶田隆章宇宙線研究所長が登場し、「スーパーカミオカンデは東大の総合力があったからこそ実現できたもの。この場で東大のさまざまな皆様に感謝をのべたいと思います」と挨拶。ノーベル賞受賞が決まった先生の登場に講堂内は割れんばかりの拍手でした。

初開催の「安田講堂音楽祭」は、音楽団体卒業生と在学生とのコラボ企画。合同演奏では「大空と」「ただ一つ」を一同で高らかに斉唱しました。五神真総長は5つの学年会全てに参加し、「『知の協創の世界拠点』構築には、産学官民の参画を得ることが肝要。様々な世代の卒業生が主要なパートナーだと考えています」と挨拶。その他にも模擬店、パフォーマンス、協賛メーカーによるフリードリンク配布などの「銀杏並木フェスタ」、各部局主催の講演会など多彩なイベントが催され、世代を超えた交流が行われました。2016年は10月15日（土）の予定です。

## CLOSE UP 柏キャンパス一般公開2015を開催 （柏地区共通事務センター）

物性研究所での体験イベントの様子。

ごろくろーの周りの星は参加を表明した各科所を表しています。

今年は「輝く科学、柏から。」をテーマに、10月23日（金）、24日（土）の両日にわたり、柏キャンパスにおいて一般公開が開催されました。本イベントには、大学院新領域創成科学研究科、宇宙線研究所、物性研究所、大気海洋研究所、人工物工学研究センター、空間情報科学研究センター、環境安全研究センター柏支所、情報基盤センター、国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構、高齢社会総合研究機構、柏図書館及び東京大学文書館が参加し、日頃の研究成果を紹介するため、工夫を凝らした体験コーナーや展示の実施、特別講演会を始めとした様々な講演会等の実施や、日頃見ることができない研究室や大型実験施設等を紹介するガイドツアー等、それぞれ特色のある催しが行われました。また、今回は、梶田隆章宇宙線研究所長のノーベル物理学賞受賞決定に伴い、「市民との交流会」や「ノーベル物理学賞受賞特別展示」等、特別な催しも行われました。天候にも恵まれ、2日間を通して、過去最高の13,000名を超える来場者が訪れ、地域に開かれたキャンパスという雰囲気が存分に感じられる催しとなりました。

# 淡青評論

七徳堂鬼瓦

## 關野貞の「遺言」

　私の所属する東洋文化研究所は、戦前の図書館内にでき、別に作られた研究所を戦後吸収した。そのためもあって、わが所には、戦前の「東洋」に関する研究資料がたくさん残されている。その一つが、わが所の門前に鎮座する一対の獅子像である。

　私がこの獅子像と関わったのは、研究者かけだしのころである。田舎から上京して研究会に参加すると、老学者の昔話に耳を傾ける。老学者は中国にでかけた。地元の護衛をつけてくれた。その護衛がやがて賃上げを要求する。ナイフが土につきささる。そんな旅だった。話の主は關野雄先生だった。お父上は關野貞、今の工学系研究科建築学専攻の教授である。雄先生の専門は中国考古である。周囲から關野貞先生以来の言い伝えが聞こえてきた。獅子は編年できる。關野貞がそういった。背中のリボンが基準だ。

　この何年か、人間文化研究機構のプロジェクトに加えていただいて、集中的に戦前の古写真を整理した。關野貞等の残したものである。写真の現地を実地に訪ね歩いて、現況を調べる。おりに触れて獅子像が目に入る。貞先生の遺言が聞こえてきた。多くの具体例を知らずしらず確認することとなり、「遺言」の具体化をはかることとなった。結果、顔つきなどの方が基準になることがわかった。しかし、背中のリボンと台石の絨毯模様は、清朝皇帝に関わるものだとわかった。絨毯模様は意外なところにもある。山東曲阜の孔家墓地の武人・文人の足もとにもあった。現代人による一般化（知らぬままの）もわかった。清朝末から一般の小型の獅子まで絨毯をしくようになり、現在の中国・台湾では、もともと清朝皇帝に関わることは知られていないようである

　文系の研究でも、文字情報以外に、実地の見聞が意外に役立つ。「遺言」を前に少し考えた。最近若い人の研究に、昔の常識が欠けていることがある。若い時の私もそうだったのだろう。「新しさ」が求められるのは古今の厳しい掟だが、その「新」を求めるうちに、幹がなくなるのでは、という漠然とした不安が残る。「新」を求める学界の「形」の中に、幹を残す工夫が、もっとあってもいいかなどと考える年齢になった。

平勢隆郎
（東洋文化研究所）


〒113-8654　東京都文京区本郷７丁目３番１号
東京大学本部広報課 TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
http://www.u-tokyo.ac.jp